

平成 26 年度 【 学園研究費助成金 < B > 】 研究成果報告書

学部名 人間関係学部

フリガナ ミウラ タカヒロ
氏名 三浦 隆宏

研究期間 平成 26 年度

研究課題名 「よき哲学対話」の構造分析および内容評価に関する研究

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	三浦 隆宏	人間関係学部	講師
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

近年、日本全国のさまざまな場所で「哲学カフェ」をはじめとする市民との哲学対話の実践が行なわれるようになってきた。ただ、これらは現在のところ実際に対話を行なうことでよしとしている感が強く、「そこでどのような対話の展開がなされたのか」といった対話内容に関する分析や「進行役の言動や場の演出などはどのような役割を果たしたか」という対話の展開の原因についての検討は、まだほとんどなされていない。そこで本研究では、名古屋市内のカフェで行われている哲学対話の様相を録音により収集し、記録として可視化することで、よき哲学対話とはどういうもので、それを生み出すための仕掛けにはどのような要素がありうるのか、および対話の評価の良し悪しを決める基準などの点について、分析することを目的とした。

2. 研究方法等 (300 字程度で記述)

本研究では、各回の哲学カフェの様相を、参加者の了解を得たうえで IC レコーダーをもちいて録音し、順次文字起こし、「全体／参加者毎の発言回数」、「発言間の時間」、「一回当たりの発言時間」、「発言者の移行パターン数」、「発言者の移行距離」などといった、発言内容に関わらない観点からのデータを集計していくことにした。さらに、発言内容をテキスト化したうえで、「全体／参加者毎の発言文字数」、「発言速度」、および「発言内容の構造」を分析し、発言内容がどのように推移しているのかを把握することを試みた。また、上記のいわば客観的な指標だけではなく、参加者がなされた対話を主観的にどう評価しているのかを明らかにするためにも、哲学対話の直後にランチ懇親会の場を設け、参加者から感想等の意見を聴くとともに、哲学対話そのものをメタ的に題材とする「メタ哲学カフェ」という対話の場を設けることで、参加者ととも「よき哲学対話」の内実を探っていくことにした。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

本研究期間内に、名古屋市内の二つのカフェ（伏見の「カフェティグレ」と名駅西の「カフェぶーれ」）において、計24回の哲学対話の場を設けた。各回のテーマやレビュー等の記録は、哲学カフェ@名古屋のHP (<http://cafephilo-nagoya.jimdo.com/>) で閲覧が可能である。

研究課題における客観的な指標に関する分析については、まだ分析途中のため、ここでは主として参加者がなされた対話を主観的にどうとらえ、評価しているのかという点に重きを置きつつ、その概要を以下に記す。

まず、参加者からの感想でよく聞かれるものとして、「哲学カフェではさまざまな参加者の意見を聴けるのがよい」というものがある。よって、一人の参加者が長々と話をするのは好ましくなく、進行役による介入が必要とされることがわかった。とはいえ、発言者の遷移パターンを客観的に図表で示した場合、割と少数の参加者で多くの話がなされていたことが明らかな場合においても、一回あたりの発言がそれほど長くなく、対話をその少数の発言者間で回している状況では、参加者らがその対話をよいものとして評価していることが明らかとなった。

また、研究成果を確認する意味も込めて、1月と2月に「哲学的な対話とは？」と「対話とは？」と題する、二つのメタ哲学カフェの場を設けたが、そこでの対話から以下のことが明らかとなった。それは哲学カフェが、他の市民参加型の対話であるサイエンスカフェやNSD（ネオ・ソクラティックダイアログ）と違い、自己完結型のものではなく、低コストで不完全であるがゆえに、逆に参加者からの「受援力」とでも呼べるものを引き出すことが可能であり、その結果、対話にみずから参加した感が強いほど、参加者はそこでの対話を肯定的に評価する傾向にあるということである。つまり、「よき哲学対話」というものは狙って達成できるようなものではなく、むしろ、ある程度偶然に身をゆだねられるべきものであるということが明らかになったと言える。

4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

① 哲学カフェ	② 対話	③ 進行役	④ 受援力
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

- ・共著書：『哲学カフェのつくりかた』カフェフィロ編、大阪大学出版会、2014年6月刊行、(第4章「哲学への弱い紐帯——中之島哲学コレージュでの哲学カフェ」(55-69頁)を担当)
- ・論文：『「私たち」という感覚を育むために——哲学カフェとシティズンシップ』、『臨床哲学』第16号、大阪大学臨床哲学研究室、頁数未定、2015年3月刊行予定
- ・書評：石原孝二編『当事者研究の研究』(医学書院)、『社会と倫理』第29号、南山大学社会倫理研究所、137-141頁、2014年10月刊行
- ・学会発表：「哲学カフェとシティズンシップ——『私たち』という感覚を育むために」、第7回応用哲学会、於：東北大学、2015年4月発表予定